

統一

第百五十五號

明治四十一年一月十五日發行

目次

新年の辞
 憶持不忘
 久遠實在の活動
 新年の所感
 當体義抄 (第二講)
 申歲問答
 大國民の資格を造れ
 宗務廳錄事
 報
 教學財團公告

本多日生
 山根顯道
 笹川真應
 梶本日桓
 坂本日桓
 青瀬貞雄
 清瀬貞雄

新年の辭

本多日生

涅槃常樂の信仰に生くる者は、人生の別離生滅すら尙ほ心を動かすに足らず、されば一年の去來歲月の遷流は何等の感慨を惹くなかるべきか、然り最大最後の信仰は歲月の遷流を思ふ毎に、一段の光明と生氣とを加へ來り、新年を迎ふる毎に、道念の法悦愈々圓かに活動の氣力益昂がるを覺ふ

(1) されど涅槃常樂の妙果を莊嚴せんとの信仰は、法喜満足の安立と同時に、自覺せられたる活動實踐の本分あるべくして、この活動の跡を回思し、實踐の前途を想見する時、誰か復無限の感慨に打たれざるものあらんや、新年は實に活動の本分に向つて新らしき感想を惹起する、善良なる動機なりとす
 斯くの如く信仰に生くる者の新年は、一面に歲月の遷流を實感して、法悦の氣力益々加はり、他面には活動の實際を追懐し豫想して、清新なる警醒を促がすの意

義を有す

吾曹同人は統一の記者として盡くすの外、幾多の重要な職責を帯びて、教界に奮闘しつゝある者、今や明治四十一年の新年を迎へて、安くんを清新なる警醒を懐かざるを得んや、吾曹同人の過去一年間に關與せる事業は、教學財團の完成、教團の平和的進歩、即ち宗務百般の經營に於て、學事としては大學林の刷新あり支學林の開闢あり、講習會としては本山に於ける西部講習會あり大綱に於ける東部講習會あり、茂原に於ける夏期講習會あり、他面には早稻田研究會、茗谷學園徳風會等に於ける日蓮主義の講演あり、布教としては本山に於ける大會數日の顯正傳道あり、千葉縣大會の縣合大布教あり、栃木縣下と名古屋市の巡教あり、千葉町、岡山市、綾部町の對外傳道あり、我が團員として上田智量師は神戸の教會を創設して専心布教に盡碎しつゝあるあり、木村義明師の宇都宮に迷信の排斥に苦闘せるあり、小林日至上人の東京市に於ける十年一貫せる布教あり、千葉縣布教隊の上總に於ける活躍あり

り、墨照玄師の單身各處に轉戦せるあり、野老乾爲師の姫路に於ける立善婦人會の布教あり、故吉田完亮師の綾部に於ける布教あり、能仁事一師が、岡山に於ける幾多の會合に臨みて益々弘通の力量を發揮せるあり京都に於ける諸師の傳道、大覺青年會の活動あり、大橋日鏡師が廣島山口等の管内に於ける熱心なる巡教あり、池澤快整師の單身小笠原島に渡りて宣教を試むるあり

その他造營としては中村乾信師の濱野本行寺に於ける庫裡の落成あり、岡本圓正師の名古屋靈山寺に於ける庫裡の増築あり、山岡會俊師の東金西福寺に於ける本堂の大修繕あり、久我默宗師の品川真了院に於ける庫裡の新造あり、吉田義著師の池端妙顯寺に於ける、伊保内教精師の品川清光院に於ける、何れも表門其他の新築を終はれるあり、能仁事一師の岡山本行寺に於ける庫裡表門其他の大造營は已に着手せられ、野老乾爲師の姫路妙立寺に於ける經藏の新築は成り、武聖麟師の草生久成寺に於ける大改築は終を告げ、故吉田完亮

師の計畫せる丹波了圓寺の表門鐘樓の新築は今や工事を急ぎつゝあり、品川妙蓮寺は山根顯道師の時に於て庫裡全部を改築せられ、芝沼瑞良師の那須野妙經寺の移轉新築は遷座式を舉げたり
已上はその著明なるものを列ねたるに過ぎずその他に寺門の造營せられ、又た布教の奏効しつゝあるもの尠からず、全体に於いて着實なる經營と穩健なる宣教とは大に進み來れるを見る、蓋し他面には個人思想の風潮に伴ふ悪影響の近來恐るべき暗流ありたることにし、その一例としては教學財團の勸募に當りてこの空前の美譽百年の大計を覺らず、却つて自家の計を爲し若くは寺門の造營に托して、その責任を免がれんとするあり、若くは些少の申込を爲してその責任を晦まさんとするあり、事を左右に托して未だ應募せざるあり、斯くの如きは實に道念の微弱を表明せる尤も恐るべき陋風なれば、苟も護法の赤心ある者は、この弊風の絶滅を期せずんばあらず
道念若し一たび去らば教家の事百事休す、聖祖の所謂

行學の二道は信心より起り、行學絶へなば佛法あるべからずとの誠告は、今尚ほ吾人の頭上に輝けり、豈に勉めざるべけんや、豈に誠めざるべけんや、吾曹今や新年の警醒に會ふ更らにこの聖訓を体して進まんのみ

憶持不忘

山根顯道

何時も三月常月夜、吉祥累積で以て一生を終ることが出来るものなら、それは何とも人間ほど味なものは無らうけれど、そんな果報者は、お互人間にはマゝ腰行厨で搜し廻つても中々見付からない、處がお互人間は、そんな甘ひ事が何處ぞ其處等あたりに 轉がつてゐる居るかの如き考から 蚤取眼で搜しつゝあるの、兎角自己の立場から上へのみ眼をつけて、淺猿しくも自己より富貴のもの高位のものを羨む、然らば其高位富貴の身の上にならざうかと云ふに、其人々には又それ相應苦勞と云ふものがある、却て自己よりも、より以上 浮世を味氣なく煩悶して居ると云ふのが通り相

場である、さればこそ佛陀は此世界を娑婆と仰せられた、娑婆とは忍土と翻じて、何でも堪忍の二字が大事じゃ、平たく云へば隨意ならぬ浮世じやほどに、各自其分に安んじて、愚痴をこぼさず無理をしないで秩序的發展をなせよ、君子其位に素して行へよとの意味合である、て、それは百も承知二百も合點、ヨク心得て居る様な顔をして居て、ともすれば其軌道を歩み外し、忽焉として埒の外に宛轉まわり、貧慾、瞋恚、愚痴、猛然たる三毒の煩惱に、手もつけられない酔狂漢となつて仕舞ふのである、人間ほど始末の悪い動物はないとの事である、加茂真淵大人の歌に
たまく〜に人とある身を憂ふときは

そむかまほしくおもふおろかさ
如何にも其通り穿ち得た道歌である、考へても御覽遊ばせ、我等は無始已來六道輪廻の悲惨な境界に彷徨して、從冥入於冥、いつ光明の世に浮ぶ瀬がと 三惡四趣の苦果に泣きくらした身の上ではないか、それが今度幸にして人間に生れて來た、如何にも「たまく〜に

人とある身」の果報者に相違ない、げに盲龜の浮木ヒや、曇華の再敷じや、そのたま／＼に人と生れた身の上の果報を思ふたならば、何事を打捨て置きても信仰界に猛進し、向上發展の一路を邁二無二辿るべき等ではないか、イヤそれはそう思ふて居る、が、お互平和の時代順風の航海にはニタ／＼笑ふて、先輩の指導に人道を歩み佛道を修行し、信仰道徳二つながら先づ格に入つて居る様に一時は見受けられる、けれども一朝逆境に立つて、夢苦艱難の出来事に遭遇したが最後、信仰を忘れ、發展を忘れ、はては人間たる資格をも忘れまほしく淺猿しき愚躰に墮落するのである、憂きとさは……そむかまほしく……げにそれに違ひない、何たる臍甲斐なき有機であらう

惟ふに人間の一生は恰かも旅行をする様なもので、雨なく風なき快晴續きに、同氣相求の友と連れ立ちて、身には煩累なく懐中には旅費ありと來た日には、旅行ほど暢氣で面白可笑ものはないが、反對に明ても暮ても雨、風、雪、霰と云ふ嫌な天氣に、日暮れて路遠く、

加之に足弱の婦人を連れて、懐中工合もよくないと來た日には、陰氣で心淋しくて坐る故郷の懐かしく、半宵夢破れて男泣きに泣きたくなる、それは實際のない方々には一寸判るまいが、一度でも経験した方は成程と首肯される

自分は十六歳の晩秋初めて故郷岡山から東京へ出て來たが、其時分はまた今の様に鐵道の發達しない時で、神戸から横濱通ひの郵船西京丸に乗つた、處が午後四時神戸出帆の時は、小春日和の一天拭ふが如き快晴で、紀淡海峡通過の際の如きは、月色皎々一帯の金龍波上に躍ると云ふ得も云はれぬ光景に、坐る赤壁の賦など思ひ浮んで、微吟低誦上甲板に逍遙し、實に航海ほど愉快な事はないと思ふたが、松紀伊の一角を離れて志州鳥羽沖にさし掛る頃より、定めなき秋日和とは云ひながら、一天俄かに掻き曇りて西北の烈風に激浪怒濤すさまじき勢となり、晴濤なる光景物すさ云はん方なく、乗客一同色青褪めて念佛、題目、さては金刀毘羅大權現と、苦しい時の神だのみの聲を聞きしも宵の

口の嘶で、猛り狂ふ風伯雨師の暴威に、船は一上、一下、昇りては九天に朝するがごと、降つては奈落に落ちるかの様、動搖ます／＼激甚、男も女も小間物店を出し盡して滿舷ながら糞桶の如き中を、彼方へころ／＼此方へころ／＼宛然盆の上に密相をころがす如く煩悶、懊惱、叫喚、大叫喚、中には人事不省に陥つたものも有つたとの事、船員の手數も並大鉢の事では無つた事とれもふ、自分も御多分に漏れず食物を吐き盡して、空嘔吐の苦痛たらない、如斯苦悶を受くるよりは寧ろ一思ひに死んだ方がと考へた、松達州灘を過ぎて伊豆半島の見ゆる頃より、風力漸く衰るへ波濤少しく静まり、豫定より四時間遅れた丈でまづ沈没の災厄を免れて舷は横濱の埠頭に着たが、乗客は皆半死半生の爲躰、他人の援助なくては一人として足腰の立つものは無く、自分もやつと警官の保護によりて通船に乗りうつり、郵船宿の樓上にホット息を吹き返したけれども、兎角眩暈甚しく船心地去りやられて、静養二晝夜翌々日の夕方辛ふじて、本町二丁目の濱田と云

ふ定宿に安着た

已上は自分の實歴談であるが、案ずるに人間の一生も宛然こんなもので、順境に慈親の脛を喫つて氣儘の仕放題で居る間は、浮世三分五厘の鼻端まじりて譯はないのだが、それが一朝獨立の生活に入りて一戸を構へ夫と呼ばれ妻と呼ばれ、親となり而して祖父祖母と呼ばれる迄には、幾多の變遷あり浮沈あり、何時も順風に帆を揚げた様な事ばかりは無い、世海随分と波荒く、何時も快晴の事ばかりは無い、時に風雨の襲來に骨も髓も摧げんばかり、病氣、災難、火事、盗見もろ／＼艱難の續出しで逆境又逆境、如何なる宿世の因縁なればと、しみ／＼泣く事がある、恨む事がある、味氣なき浮世と嘲つ事がある、此場合に於て嗔乎として泣かず、恨まず、騒がず、悶へず、泰然自若たるもの其れ幾人ぞやて、淵川へ身を投げ鐵道線路へ飛び込むのも、得てしてこんな時の一瞬時に於ける煩悶を切りぬけ損ねた意氣地なしに多いのである

十年不易節者、功過不須問、必一種之豪傑也、然り、

盤根錯節に遺ふて始めて器の利鈍は判る、どうして懐ろ息子に此談が分るもので、

世路の艱難を叙すれば際限も無い啼だから、マ一難とこんな處で止めて置くが、要するに順境の處世は問題にならない、畢竟逆境に展轉して而も其間に、主義を曲げず操持を變せず、松柏と其節を共にすることが出来るか否、是が抑も凡物と志士との試験場、墮落と向上との分岐點である、學問とか修養とか矢ケ間敷云ふのも畢竟此處に入用があるので、恩寵の懐ろ息子で一生を終るものは、どうせ娑婆塞ぎの祿でなしと相場は極つて居る、よしたまに儲け物がある處で、それは少在屬無の一言で切り捨て、宜い、日進月歩の此の世の中に世路難は通り相場だから
佛敎の人生に於ける交渉は、畢竟此順逆二境に超然として其操持を全ふせしめ、依て以て墮落を防ぎ向上の一路を辿らしめんとする必要に應じたもので有て、殊に本化の御敎は這般の消息を一層確實に適切に將た隨自意的に、曉諭せられ懇説せられ色讀實行せられたので

順潮の場合にのみ、御門人らしき素振りをして居ても、失意逆境の際に於て遽然として頓挫落魄、道念消磨し意氣揚らず、閉口垂れ、尻込み、泣ッ面をするといふ様では、何とも聖祖に對し奉りて相濟ぬ事と懺謝しなければならぬ
憶持不忘の四字を敷衍すべく此筆を執りましたが、罪障深重にして想の萬一をも書けませぬから、讀んで左に御遺文の二三を掲げ奉りて、自他解行の増上縁となさん、
南無妙法蓮華經

善につけ悪につけ法華經を捨つるは地獄の業なるべし(開目抄、遺八一六)

たとひ如何なる乞食にはなるとも法華經をさづを付たまふべからず(四條抄、遺一六一)

世の中物憂からん時も今生の苦さへ悲しく何に況や來世の苦をやと思食ても南無妙法蓮華經、よろこばしからん時も今生の歡は夢の中の夢雲山淨土の歡びこそ眞の歡びなりと思食て又南無妙法蓮華經云々

ある
試みに聖祖の御一代を案じ祖書の一巻をも繕いて御覽せよ、其抱負、意氣、度量、慈悲、操持、その他何れの點に於ても、事實的に我等に的確なる行持の模範を御示しになつて居るではないか、就中龍の口の斷頭場裡に泰然自若として、數多の門弟信徒が別離を惜しむ涕泣の聲に答へて
不覺の殿原かな………是れ程のよろこびをは笑へかし

との梵聲音、嗚呼何たる痛切の御訓令であらう、我等日蓮聖祖の弟子檀那たるもの、一念この御訓令に思ひ及んだならば、さうして世路難に愚痴がこぼせやう、寧ろ安逸無事は我を愚にし我を墮落せしむる惡魔の栖處と觀じ、艱難われを玉にするのだ、何のこれしきの事がと、猛烈なる意氣を以て
憂き事なほこの上につもれかし
かぎりある身の力ためさん

との大勇猛大精進に住さなくてはならぬ、得意の時代

(松野抄、遺一五三一)

一期を過ぐる事程もなければ、いかに強敵重なるとも、ゆめく退する心なかれ、恐るゝ心なかれ、縦ひ頭をば鋸にて引切り、胴をば稜鋒を以てつゝき、足には鋸を打て錐を以て摺ひとも、命のかよはんほどは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、唱へ死に死するならば、云々(如說修行抄、遺九七二)

久遠實在の活動

笹川真應

其一

新年は、宇宙人生の調和したる現象である、この現象によりて、我等は活動の意義を了得し、之によりて、勞働の神聖と活動の勢力を體認し、終生渝らざらんことを願ふ所である、何故に新年は、宇宙人生の調和したる現象であるか、蓋し、宇宙は無始無終、しかも本有常然として、現顯の状態を持續せるにあらずや、これは空間の方面よりの觀察であるが、一花開いて天下

春なるを知り、一葉落て天下秋なるを知るが如き、事物の變轉を視て、坐に哀樂を催すは、時間の上より宇宙を視るが故である

新年は、これまた時間の一回轉而已、若しこれを空間の上より見れば、所謂「門松や、冥途の旅の一里塚、目出度もあり、目出度もなし」の感想が浮び来ることになる、宇宙は本來常住なるも、事物の現象に就いていへば、生滅の變轉がある、之れ則ち時間の方面よりの觀察である、しか謂へばとて、吾人は理學の原則とする物質不滅勢力保存を否定するにあらず、要するに、宇宙の觀察は二方面に涉り、この二方面は、終に一に歸着することを此に斷言し、更に宇宙現象の事物は、分段生死の法則に照さるゝといふ時間的方面より見て、新年は宇宙人生の調和したる一現象なりといふのである

其二

宇宙現象の事物は、變轉定まりなくして、分段生死の法則に照さるゝと雖も、しかも活動の勢力は、依然

りて、得るのである、理想の純善ならんとする要求は何を標準とするか、自己の研究を目的とするか、但しは感應主に依屬するか、これが解決は佛教に説所の緣起の二大要領に依て判明せらるべし、自己の努力によりて得ると謂ふ者は、則ち無明緣起の談柄にして、感應主に依屬すると謂ふは、佛界緣起の説である、吾人は此に力ある斷言をなさん、佛陀の説示されたる一代の經典に、教法、行法、果法、理法の四法が内含されてあるが、如何にせばこの内容を満足に感受するか、所謂無明(吾人)を緣起として進むか、佛界(本佛)を緣起とするかの二途ある而已、而して佛教には業感緣起、阿頼耶緣起、眞如緣起、六大緣起の如き多種の説あるも、皆これ無明緣起の圈内を出でず、而して八宗、九宗と岐れたるも、その論議する所蓋し五十歩百歩で、いまだ佛教の根本義を光顯する能はざる拙劣極まる分裂的狀態を露出せるものである、されば夫等の經典は統帥の力がなく統帥の力ある經典は則ち法華經である、法華經は前に示す所の教行果理の四法を整束し、これ

として進みつゝあり、人の死すれば灰身滅智してこれが終局なりと推定するは、この分段の意義を誤解し宇宙の本體と現象との關係を識了せざる淺薄なる考である、最近科學哲學の著しく進歩せるも、元來科學は科學、哲學は哲學の立脚地がありて、經驗に基づき事物の關係を究明せんとする、所謂現象に就いて講究する科學の定規を以て、靈界を判定せんとするは、到底なし能はざる所で、更に一段の歩武を進めて思索研究を旨とする哲學そのものさへ、存在の本義に就いてはこれを不可思議に、又は神に歸し、或は科學の方法によりて之を究めんとする者がある、宇宙根本の原理を識得せずして、何すれず活動を永久に認むることを得んや

其三

宇宙は常恒不變なり、時に或は隨緣の現象ありと雖も、無始無終大活動の勢力を發展して来る、人生はまた之に和して遺漏あるなし、而して人生生活の道は神聖の勞働にあり、吾人活動の勢力は純善なる理想によ

を光顯せられてある、これを顯本の數光といふ、分裂的説明は法華經に於いて統一的説明となり、時間的説明に現はれたる教法や果法の佛陀は、空間的圓滿の説明となる、これを人開會、法開會の妙法といふ、法華經、壽量品の説相は、實にこの妙法を發揮して久遠實在の活動を躍如たらしめた、之に於いて吾人思ふに、純善なる理想の要求は、完全なる教理に従ひ、完全なる實在の音容に化せられてこそ、始めて満足するものと信するのである

其四

宇宙人生の調和に就いて、満足なる解決を得ると得ざるとは、吾人が安心立命の上に至大の痛痒を感ずる而已ならず、延いて活動の根底に動搖を來すことになるされば人類界をして曙光あらしめんとする者の、この問題に苦心するは當然の過程である、さりながら科學は科學の職分があり、哲學は哲學の職分があり、宗教は宗教の職分がある、而して科學は形而下に屬し、哲學は形而上の學問なるも、宗教のその如き信行の要

素が欠けておる、科學といひ、哲學といひ、研究本位の説明にては、到底世界觀(宇宙)人生觀の調和に成功せざるなり、この調和に成功せずば、吾人がこの人生に活動するの始終を判定する能はざるは、火を賭るよりも炳かなる事證である、然れば宗教はこの消息を如何に説明して吾人に満足と與ふるか、これ最も興味ある問題である

其五

人生生活は自己生存の努力に埃ざるべからず、何となれば、吾人の周圍に纏綿する數多の障害物を排除する勇氣を一日片時も休息すべからず、これ人生は向上の進路を辿り、諸の悪魔と奮闘し、凱歌を奏するを専務とすればなり、この凱歌は人生最後の判決にして永久に光明を傳ふるものである、靈性の發揮肉の折伏の價値は實に此にあり、籐を萬世に垂るゝの聖人は皆微を同みす、而も教法の正見邪見によりて影響の強弱、結縁の厚薄を見るのである

基督教の宇宙觀は、六千年已前に神ありて、この世界

を創造したるものとし、人生すべての問題は、神の主宰する所とす、而してその世界觀は舊約の聖典に依り人生觀は四福音書たる新約の聖典による、殊に彼の教徒の渴仰する基督の言行に就いては、山上の垂訓たる「爾の敵を愛し、爾を呪ふ者を祝し、爾を憎む者を善視、虐遇迫害者のために祈禱せよ」といへる訓示を一大真理とし、基督が三年の奮闘を稱讚し、十字架の上りしを肉の折伏の犠牲とし、基督の復活を神子契合の證明とし、以て久遠實在の神あることを主張せり、されど山上の垂訓の如きは、實踐道德教ともいふべき孔孟の教にも、これと類似の点は多くあり、且久遠實在の神に對する概念も、薄弱にして聖典に根據を有せず神そのもの、性格に就ても、混沌として佛教の佛陀三身即一の説に及ばず、嘗て吾人が正教會の傳道士と對論せるとき佛陀と天帝の性格に就いて追窮したるに、明晰なる答辯をなす能はざりしは、吾人顯本の教徒が主張する「歴史的の佛陀は、即教理的久遠實在の佛なり」といへるに比較して、天地の懸隔ありと謂ふも敢

て不可なかるべし、宇宙觀、人世觀に於て、基督教は未だその所に適中せず、また以て活動の意義を闡明にするの能力なきことを識に足らむ、其他回教、印度教の如き、基督教と大同小異にして擇ぶ所がない

其六

佛教に於いても、その經典に依て、佛陀の力用、教法の勝劣を異にし、從つて宇宙人生の解釋にも相違を來たすことは、上來述なる通りであるが、教理と人格は、根本に於ても、又感化の上にも、大なる關係を持つことは、動かすべからざる原理である

村博士の如きは、此の原理を曲解して、小乗の教理も、大乘の教理も、同一の真理に達するものとし、彌陀、藥師、大日、釋迦とその名を異にするも、同一の佛なりとするは、人開會、法開會を識らざる愚論である、されば同氏の統一論は、原理論に於いても、佛陀論に於いても、眞實の統一を光顯することが出来ない殊に久遠の實在を認定するに、淨土教に執著し、法華經壽量品の「惠光照無量、壽命無數劫」の文を引て、

彌陀佛の久遠を立證せられたるが如き、また緣起論に於いて、眞如緣起、六大緣起を推稱せられたるが如きは、佛教研究の正鵠を失なへることを自白したるものにして、篤學なる博士の爲に惜むべきことである

佛陀の完全實在を發揮したるは、法華經にして、之に依て教理の完全を實現し、吾人活動の本能性を完全ならしめ、宇宙人生の調和を満足に表白したり、先師のいへるあり、「久遠の所成、本來衆生の覺體と、その理體一なるが故に、果極の境智を信すれば、本性開發して忽に妙體を修顯す」と、この主張は、法華經壽量品に基き立論したるものにして、久遠實在の活動と、吾人の活動を契合し、果極の境智を信するに依て、宇宙人生の關係を遺憾なく發揮したるものである

其七

久遠實在の本佛は、佛果起用の大活動力を有し、その慈悲、智慧、力用は、宇宙に遍滿して無限の勢力三世の亘れり、吾人の活動も、この本佛の勢力に包まれたり、これを佛界緣起の妙談とす、これ日蓮聖人獨得の

顯見にして、この妙義は法華經量品に光顯せられて
 餘蘊なし、壽量品には法佛の統一、久遠實在の音容、
 肉的折伏の眞價、靈性の發揮等、洩さず本佛の救濟力
 に包まれてある、之れ法華經は佛教根本の原理にして
 久遠實在の佛陀が一大宣言なりといふのである
 我等の渴仰する所は絶対の佛陀にあり、法の尊重すべ
 きは佛陀の教訓なるが故である、宇宙の自然法に無限
 の救濟力あるが如く思ふは、未だ宗教の意義を認識せ
 ざるなり、吾人は佛陀の完全實在を信じ、これと共に
 教理の高潔によりて人格の偉大なるを信じ、日蓮聖人
 の絶大なる識見と、聖人が折伏の大勢力とその奮闘に
 服し、聖人の大活動は久遠實在の大活動に調和せられ
 たるものと認め、これを吾人の資料に附與せられしも
 のど自覺するのである(完)

春や昔初日芽出度きお題目

南山

手紙書く朝の机や福壽草

南山

考へても見なさい、數年前迄は權力の争奪で随分
 喧嘩に花を咲かした宗門が、今度は打て變つて、
 總監ですかー御免を蒙りましやう、部長ですか
 眞平御断りと、道友の誰れ彼れ云ひ合した様に、
 揃ひも揃ふて何の蚊のと跡よく迷を打つた中に、
 逃げ損ねてまご／＼して居た愚鈍な子の雙肩へ、
 二役の重荷を押冠されて仕舞つた云ふ様な仕
 合、が其逃げ損ねが或は子の幸運かも知ないよ、
 兎に角思はぬ舞臺に思はぬ役者と成つたので、ぬ
 れぬ前こそ露をも厭へ、出た以上はさうやれる
 やれぬは過去の問題で、何處迄もやる積りす、
 公平に忠實に至誠佛祖への御奉公と思ふて、やつ
 て見る分の事サ、諸賢が權力を望まず政事舞臺を
 嫌がる様になつた處を見ると、或は宗門の進歩と
 云はなければなるまい、平和は掟の事、此上は或
 方面に大發展を試むべく、勇往邁進すべきのみ、
 豊他あらんやサ
 元來宗門内部の云爲は、どうなり秩序を維持して

新年の所感

梶木日種

茲に明治四十一年の新春を迎へ、歳と共に吾人の精神
 も清新になつたから、聊か新年の所感を述べて宗運の
 發展進歩を祝福しやう
 予は昨年六月の初め召されて東上し、爾來宗務の庶務
 と、教學財團の事務と、兼ねて本誌編輯の雜務に従事
 して、寸隙だも得なかつたが、今幸に新年でふ祝福
 の好期に會し大方の諸賢と共に同慶を頌ち、以て聊か
 平素の勤勞を慰め得ることを悦ぶのである
 先づ吾が宗務廳に於いては、昨年六月中、今成宗務總
 監は、腦病の爲めに重傷に耐へ難き故を以て、井村
 教務部長は、自坊の經營と、將來教學部面に雄飛する
 理想の下に、孰れも職を辞退され、之れに替りて、山根
 權僧正は、入つて宗務總監の要職に就き、兼ねて教務
 をも掌理せらるゝとなつた、そこで山根總監に就て
 その當時、意見を叩いて見たが、次の如き挨拶であつた
 ハ、一予が宗役に出てお目出度と、御挨拶痛み入
 ります、何の君「一夏一會打かはり」は、開
 祖の遺風だから、交る／＼やつて見る分の事サ

行けばよいとして、幾百有望の健兒は、宜しく緊
 御一番、和衷協同して對外的大發展を庶幾すべき
 次第である、即ち區々たる宗役杯はどうなり、事
 務の才幹あるものに一任して置けばよいと云ふ概
 がなくては、宗門の前途は到底光明は望まれな
 い、近年此氣風が多少動いて來たのは、何よりも
 の事で、予は嘗て「予をして宗門第一の愚者たら
 しめよ」と云ふ事を、或席上で演説した事がある、
 それは子の様な腑甲斐ない一兵卒が、宗門に重き
 を置れる様では、實になさげないとの意味であつ
 た、今度道友諸君が銘々宗役を忌避して、貴公や
 つてくれと子に押冠せたのは、腑甲斐ない貴公で
 も、此位な事はやれるだロー、自分共は他に大に
 運動の方面ありと、肚裏で言つてるのだローと、
 此意味に於て、予は心地よく宗務總監兼教務部長
 の辭命を拜受したのである、されば道友諸君が宗
 門の爲に各々其好める方面に對つて、宗門の名譽
 を高め、勢力を擴張し、實力を富すべく活躍して

呉れるかはり、予は内部の秩序を保持して、些のまごつき無らしむべく、翼々としてマー何の事はない、世話女房の役目を全ふしたいと云ふ量見である

又考へて見れば、御奉公は今が最適時で、眼がかすむの、腰がかさむの、根氣が弱ると云ふ時分に、再びおびき出されるのも、よい加減のもので今ならばよし荷物が重も過ぎやうが、腰骨が摧けやうが、勇氣を鼓舞してツイスキーの二三盃も引掛ければ、翌日は回復すると云ふもの、まゝよ奉公次手にと、斷乎として自己の都合を犠牲として應諾した譯々、予は此意味に於て、自己の幸運兒たるを自覺して居る

曾て龜に聞いたことがある、首を出すこと打たれる、打たれると知りながらも、甲羅の中に立て籠つて計りは居られないと、予が今回の就職も龜の述懐と同じである、首をつき出したが最後、打たれるのは覺悟の前だ、が、正直に忠實に佛祖への御

れて居る、さうなれば内外共に賑敷いことであらう、随つて宗門の事態は時に觸れ機に乗じて益す向上發展することであらうと思ふ

予は今少しく過去一年間に於ける宗教界の出来事を回想して、今後の發展進歩を鼓吹して見たい

昨年中吾國の宗教界に於ける出来事中最しきものは、四月東京に於いて萬國基督教青年大會が催はされて三十餘ヶ國の諸名士が來朝し、又同月救世軍の創立者にして指揮者たるブリス大將が來朝して、共に大に世人の注意を喚起し、諸處に於いて講話に演説に少からぬ感化を興へた、之れに對抗する爲めか同月全國佛教徒大會が東京に於いて開かれ、五月に全國神職大會が同じく東京に催はされた、以上は皆餘りに御祭騒ぎで實際の効果は擧がらないといふ評もあるが、兎に角近來宗教界に於ける賑かな活動であつた、殊に基督教は引續き全国各地に大舉傳道を企たて頗る活動した状態であつた、最近の日本基督教勢を見れば、受洗者千八百貳拾名(前年度に比し三)、總會員一萬六千三百餘名(前年

奉公ゆへの頭の瘤は、或は名譽かも知れん

かういふ風で、今日の宗門は、實に平和な状態であることが判る、なんと悦ばしいことではないか、如斯な鹽梅で以て、宗務は着々と捗つて行き、笹川法務部長は、その管掌の事務が一段の整頓を告げたといふ所から、十一月下旬に於ける宗會議員總改選の了るを機として、是れ亦將來の活躍を期して、その職を辞退し、徐ろに後方勤務に就かれた、依つて鈴木權僧正は法務部長として、藤崎僧都は教務部長として入應せらるゝこととなつた、これは十二月一日の出来事である、さて又宗會議員改選の結果、今成師は宗會議長に、能仁師は同副議長に當選され、次いで評議員補改選の結果は、井村、今成の二師當選し、井村師が擔當評議員の任に當られることとなつた、宗門の政治舞臺は、かくして閑歴あり、才幹あり、手腕ある役者の勢揃ひとなつたのである

さて本年は五月に管長職の改選がある筈である、又次期の帝國議會には宗教法案が提出せらるゝとか噂さ

は千二百、献金額七萬一千七百餘圓(一萬三千五百七十名増)、財産總額二十九萬七千餘圓(百餘圓増)で、新會堂六、獨立教會六を増し、傳道局は一萬圓以上の献金を得て弘く傳道し得たといふ、又萬國基督教青年會の統計を見れば會の總數七千六百七十八(前年より三)、會員數七十六萬六千六百五人(四十八人増)、之れが中心となつて専ら會務に盡瘁せる幹事の數が千二百二十九名(八名増)、その會館數千五(二十四増)である、それに又米國の傳道者の中には、近來頻りに外國傳道の急を説いて、今より三十年の後は世界到る所に普く福音を傳へて、キリストの名を聞かないものは一人もないといふ風にしたといふ力んで居るものがあり、已に昨年の如き傳道事業が緩漫であるのを慨き、大資本を投じて大々的擴張を計らんと主張するものが起り、中にも長老派の有志者は「オマハ」に會合して、年々六百萬弗を募集し新たに四千名の宣教師を海外に派遣しやうといふ希望を宣言したといふ、抑も米國のクリスチアンが海外傳道の爲めに費す所の金額は、百年前には六千弗に過ぎなかつた

ものが、今日では七百萬弗、即ち千倍以上の金額に上つて居るから、その傳道事業の擴張、進歩は實に偉大なものである。只米國の話だけでもこれだから、廣く總ての基督敎國の状態を委細に調査して綜合して見たならば、頗る盛大なものだと思はれる。

願みて昨年中の佛敎徒の状態、中にも吾國の佛敎徒の状態は如何であるか、その海外傳道は如何に、新領地の開教は如何、國內の狀況は如何、先づ眞宗本派は暹羅の首府盤谷に布敎堂を新設し、滿韓經營の爲めには開教費二十餘萬圓を共保財團より支出し、同派主催に係る滿州佛敎青年大會は、大連に夏期講話會を催し、布哇、ホノルル別院内には眞宗敎會の本部を置いて、労働者向きの雜誌を發行し、布哇七島各所に支部及び出張所二十一ヶ所の設けがある、同派の開教師は、米國に四十人、清國に三十五人、韓國九人、西比利亞に二人で、昨年度は二十五萬圓の經費を要したといふ、次に大谷派では、日韓條約の成立を機として大發展を行ふ方針で、開教師三名を増派することとなり、新たに

宗、曹洞宗等の韓國布敎、又は臺灣及び樺太に於ける眞宗、曹洞宗、日蓮宗等の傳道の状態、又は淨土宗の黒田某が從來の同宗大學を全部開放して宗敎大學と改稱し、佛耶兩敎並に哲學其他宗教上に關し帝國大學以上の敎義を授くる計畫にて、同宗より十五萬圓を出資して果嶋に大建築を起すこと、早稻田大學に宗敎研究科を九月より創設したること、七月に元良博士の發起にて學者、宗敎家の名士相集り宗教談話會を東京大學内に催はしたると、又博覽會開期中に於ける佛耶兩敎の傳道、中にも淨土宗傳道館の精勵、眞宗本派が東京癩兵院へ如來堂を寄附してその死者の追吊を營むだこと、同宗佛光寺派の本山が開祖六百五十遠忌の紀念圖書館建築の議を起して、各種の佛敎圖書と新刊書を集め、年々一萬圓の新規購入をしやうといふこと、又目の雲照律師が八十の高齡を以て滿韓の野を跋渉して我が忠死者の英魂を吊ふたこと、渡邊無邊、佐藤進等の名士が參禪辨道を趣旨として組織したる氣樂會か、十月中東京本郷座に於いて福風鼓吹大演說會を催はし

三ヶ所の布敎所を増設し、本年度には十ヶ所新設の計畫であるといふ、淨土宗では十餘年前より布哇に開教して居るが、目下同地に七敎會堂と小學校を有し、開教師十名あり、昨年米貨八千弗を投じて開教院を新築することとなつたといふ、又智恩院からは獨逸は於ける佛敎事情の調査として特使を派遣したこともある、眞宗眞正寺派では、開祖七百年忌紀念事業として、本山の本堂其他の再建と共に、優秀學生を大學商業學校等に入れ、海外留學生を派遣することとなり、已に宗教哲學、博物學研究の爲め米國へ二名、宗敎歴史研究の爲め英國へ一名留學生を派遣した、眞言宗智山派では、海外傳道會の第一着事業として、韓國屯田傳道を試みる計畫で、今春早々渡韓の運びに至るといふ、又敎團以外の施設としては、大隈伯を總裁とし、長谷川翁を會長とした、海外傳道會といふが組織せられて、本年四月より第一に滿韓傳道の準備をなし、順次歐米に及ぼすの方針で、傳道師養成學校を東京に設けるといふ、其他眞宗本派、大谷派、淨土宗、眞言宗、日蓮

たること、飯田町國學院大學内に神道研究會を設置したること、或は英國宗敎界の名士として外國傳道に熱心にして宗教的社會的事業家たるグレゴリー、マントル氏を、我國在留の外國宣敎師の夏期講習會に招聘して、講話會、救靈大會を催はしたること、これ等の出來事を數へて見れば、昨年中の内外宗敎界の状態は随分と賑はしいものであつた。さて又我が宗内の出來事は如何に、先づ四月には臨時宗會を京都總本山内に召集され、同時に敎學財團評議員通常會の初回を開き、又本宗西部講習會の初會を一周間開設し、續いて例年の總本山の大法會を執行され、八月は上總茂原町に於いて修養會の主催に係る夏期講習會一周日、十月は上總大綱町蓮照寺内に本宗東部講習會の第二回を一周間開かれ、續いて同寺内に新たに千葉縣支學林を設置せられて、その開林式を挙げ、同月下旬千葉縣聯合大法會を濱野本行寺に執行されたこと、などが著しきものである、又敎學財團事業は着々武歩を進めて、昨年末には寄附申込金額七萬餘圓

に達し總額の三分一強に及んだ、中にも關西地方はその成績良好で、各地の住職者は斯の宗門の公共事業に盡力した功勞に依つて功勞章を授けられるものが續々出來た、併し關東方面、別して千葉縣下と東京地方は、勸募の着手に後れたから、本年は充分に大成效の好果を顯はすことであらう、本來斯の基金の總額が二十萬圓であるから、如何な事業をするにしても十分とはいへない、のみならずこの基金には手を付けず、その利子のみを以て使途に充てるのであるから、實に乏しい心地がするのである、前に述べた如に西本願寺では滿韓經營のみでさへ二十餘萬圓を投資するといふてはないか、淨土宗では單に布教基金としてさへも尙ほ五十萬圓を蓄積する計畫があるといふてはないか、それを我が教學財團は布教興學一切の基金として僅かに二十萬圓を勸募するのであるから、志ある仁達はその少額を憂へて居る位である、であるから苟も住職たるものは、宗門の根本性命たる斯の大事業に對しては、萬事を抛つて全力を注がねばならぬ、それが即ち佛祖

に對する第一の御奉公である、決してこの際期の大事業に對して悠々緩々と澄し込んで居る如き道念の微弱な仁もあるまいと思ふが、何卒か一層奮勵して頂きたいものである、彼の天台宗でも護持財團を組織して早晩職級、寺班の大變更を行ふてまでも、教學基金の蓄積を遂成しやうとして居るといふ、時代の趨勢とはいひながら、何處も同じく充實發展を計ることに腐心して居ることが見へる、往時を顧みれば、吾が先人は草鞋破笠單身孤杖、席暖なるに暇あらずといふ情態で献身的傳道に従事せられ、一生の内數多の道俗に感化を與へ堂塔伽藍までも建立せられた、今の吾人はその流を汲めばこそ額に汗せずして易々とその遺跡を承繼し、御前と仰がれ上人と立てられて空しく一生を終るかと思へば、實に空恐しき身の冥加と謂はねばならぬ、我が身の程を知つたならば、假令如何なる事なりとも身に叶ふ丈の御奉公を觸み、億萬分の一たりとも、佛祖の鴻恩に酬ひねばならない、恰も好し、今我が宗門には百年の大計を立て、教學財團の事業を起し

た、吾人の身に相應した御奉公はこの事業に對して力を盡すより外はない、勞少なくして効著しく何よりも最と易い事業である、されば本年は早々より一段と奮勵して速に斯の事業を成效させたいものである、さすれば宗務當局者に於いては、これを基礎として著しく宗門百般の事業を發展進歩せしめて人後に落ちないやう總ての設備を整へらるゝこと、信ずる抑も吾が日蓮門下、詳く言へば日蓮の正義を奉ずる吾人願本の教徒は、本佛釋迦牟尼如來の大慈大悲の一大徳教を奉じて全圖浮提を濟度しやうといふ一大理想、否な理想といふよりも寧ろ一大慈業の下に活動健闘すべき光榮ある使命を帯びて居るものである、換言すれば、個人としては人格を完成せしめ、團體の上には低き生活状態より引上げて高き生活状態に向上せしめ、國家と社會の上には不平、衝突、危険を除き總ての缺陷を補ふて、満足、平和、秩序、進歩の活力と光明とを賦與し、實在不滅の觀念を基礎として、現在に於いてはこの人生をして幸福に、快樂に、平和に、満

足に、光明あり活力あるものたらしめ、更に進んで未來は常住不滅完全實在の最大目的に到着せしめ、所謂成佛の大果報を成就せしめねばならぬ、是れが即ち佛事である、菩薩行である、實に是れ吾人願本の教徒が生命を献げて従事すべき畢生の事業である、口頭で言ひ顯はせば容易いやうであつて、實際の上にはこれを實現して行くには却々の大事業である、固より前途遠く遠である、されば先人は粉骨擲身して斯の佛事の爲めに奮闘活動を續けられた、義祖日蓮上人が一代三十年間の行動は畢竟這般の鴻業に献けられたる活劇ではないか、上人示して曰く、
一切衆生の一切の苦を受くるは、悉く是れ日蓮一人が苦と申すべし八轉抄 四七八
日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來までもながるべし觀心抄 四八八
日蓮魁したり、若黨共二陳三陳つづきて、迦葉、阿難にも勝ぐれ天台傳教にも越へよかし種々振舞抄 同七六七
我が門家は、夜は眼を斷ち晝は眼を止めて之を案せ

よ、一生空しく過して萬歳悔ゆること勿れ富木抄七二四元祖の遺訓は昭々として現に吾人の頭上に光を放ちつゝあるのである、吾人豈に奮勵努力せざるを得ないではないか、況や本佛釋迦如來は大慈大悲毎に吾人を照護したまひて、吾人が耐へ難き難事を能く忍ぶを視そなはし、そこに救の御手を垂れさせたまふのである、寔に頼母敷事ではないか、然るに若し何等自覺もなく毫も努力しないならば、それこそ一日も生存する要を認めない、存在の必要なものは滅亡を速かねばならぬ、見よや、今より三十年の後に世界到る處にクリストの名を知らしめやうと勵むものは、彼の孤獨の一神を奉ずるクリスト教徒ではないか、名は佛教徒と稱へながら本佛釋迦如來を忘れて徒らに權佛を偏崇する念佛門徒でさへが、巨額の資財を抛つて世界各地に傳道を競ひつゝあるではないか、その身は世俗の中に在つても尚ほ佛教徒の名の下に世界傳道を試みんとする海外傳道會一團の抱負は如何、これ等幾多の活動を顯本教徒たる吾人現下の状況に比らばたならば、如何

とも、敢へて毫も介意するに足らないと思ふ、要は只各自その責任を自覺して奮勵努力すれば足るのであるかくして發展進歩するならば遂に天四海皆歸妙法、一切衆生皆成、佛道の宿志を實現することが能うであらう、庶幾くば吾が同信の兄弟姉妹よ、年と共に更にその精神を新にし、相俱に協心戮力して偏に向上發展を計り、以て最大目的を達成することに努めたい、これ子が戊申の新年に於ける所感である南無本佛釋迦牟尼如來、大慈大悲哀愍擁護を垂れ、吾人をして道念堅固、佛事成辦せしめたまへ、南無妙法蓮華經

勸題 社頭 松

おは御代の國やすらけくすみよしの

松にならひてとしや経のらん

此神の宮居のむかし古ければ

みかきの松は雲にそびへり

日 航

眞 月

此系山人

白鶴和鳴佳氣濃

扶疎密葉綠重々

瑞烟祥露籠朝日

華表頭前千歲松

に厚顔なるものも忸怩たるであらう、ア、吾人は眞に愧死せねばならぬ、然り、吾人の過去の故き生命は已に業に舊き年と共に滅び去つたのである、されば今より後は更に活力あり光明ある新生命を發揮せねばならぬ

「春は蠢なり、物蠢生して乃ち動運す」と、春は發動發展の良辰である、風光駘蕩百花の春、人は春暄に遇へば則ち四体舒泰、春山淡冶にして笑ふが如く、春海波静にして平和を示し、春風能く萬物を發育す、誠に春は平和、發展、進歩の好時節である、春の如き我が宗門は今茲に新春を迎へて正に宜しく平和の内に大々的發展を試みねばならぬ、學者は學理の濫奥を窮め達者は後進を善導し、文材あるものは筆を振ひ、辯才あるものは口に語り、宗教の料理、寺門の經營、或は布教に興學に、百般の事皆な各々己が長所を選んで事に従ひ、そこに全力を傾け注いで協心戮力するならば、縦しや教團は小さくとも、人物は少くとも、資力は乏しくとも、其他總ての機關設備に於いて満全ならず

當鉢義抄(二)

齡八十四老比丘 坂本日桓 講義

偕て本席より入文の講義を致して聽せませす、當妙判は大に分て兩段で、一には、問妙法蓮華經の下より十五妙法難解假譬易顯釋是、意也と云ふ文に至る、二百一行の判文は、所證の當鉢の蓮華を明し△二には、十五問劫初己來の下より、當妙判の結末の末法、導師讓之、不弘通、給也と云ふ、一百五十九行十字の判は、當鉢蓮華の能證の人を判じたる妙判であります○又た初の所證の當鉢蓮華を明したる文に立ち飯て三段で○初は正しく所證の當鉢の蓮華を明す、此の中に又た分て兩段で○初の七行十七字は、性徳本有の當鉢の蓮華を明し○二には、九丁問一切衆生の下は、修徳今有の當鉢の蓮華を明す、其小科目は講義の文々に於て分科して聽せることに致しませう

問妙法蓮華華經者、其、鉢何、物、乎、文

さて御尋ね申す、法華經廿八品の上に、妙法蓮華經序品第一、妙法蓮華經方便品第二、乃至妙法蓮華經普賢

菩薩勸發品第十八と安置し奉る、其妙法蓮華經と申す五文字の法躰は、如何やうなる物を指したるのて有ります乎と問はれたる也。

答フ十界、依正即是妙法蓮華之當躰也。今問者の申す妙法蓮華經の五字の法躰と申すは、十界の依正と云ふて、下は地獄界の正報の能居の人も所居の依報の大熱鐵の國土も、上は佛界の正報の能居の人も所居の依報の寂光の淨土も、總て十界の依正が即妙法蓮華經の法躰なる者であると答へたる判である。
(依報正報の講義は、昨年の講習會の時、十法界抄) 此の最初の問答の妙判は、總じて性徳、修徳の二種の妙法蓮華の當躰を明したる問答で有ます。

問フ若し爾者如我等一切衆生、妙法ノ全躰也、也可云云歟文

若爾者の三字は、前條の御答の通りならばと申す辭である、前條の御答の通りならば、我等が如きの一惑未斷の凡夫の一切衆生も、妙法蓮華經の全躰の身の上なりと云はれます歟と問はれたる也。

なることを證したるのである、此の所引の文を講義しますれば、此の文の上に諸法實相とある、其所謂諸法と上の文を受けて釋したる辭である、此の諸法と申すは十界の正報の衆生と、依報の國土とを指して諸法と説きたるのである、此の十界三千の諸法には、十如と云ふ者が具足してある、如是相、如是性、乃至本末究竟等の十如である、此十界十如の權實の諸法の甚深の境界は唯佛與佛乃能究盡し玉ひたる妙法蓮華の不可思議の當躰である、其權と云ふは十界の諸法のこと、實といふは十如のことである、然るに經文に諸法實相と説きたるは略して一を舉て餘の九如是を蔽ひ收めたる者である、委く説けば、諸法の如是實相、諸法の如是實性、諸法の如是實躰、諸法の如是實力、諸法の如是實作、諸法の如是實因、諸法の如是實緣、諸法の如是實果、諸法の如是實報、諸法の如是實本末究竟等と説くべしと、妙樂大師の釋籤に斯の通り指南の釋があり、ます、然るに真如の妙理と申せば、實相のみと得意ては成りません、實性も真如で、實躰も真如で、十如

答フ勿論ナリ也、經云所謂諸法乃至本末究竟等、

云云、妙樂大師ノ云々、實相必諸法、諸法必十如、十如必十界、十界必身土云云、天台ノ云々、十如十界三千諸法、今ノ經ノ正躰耳云云、南岳大師ノ云々、云何ナリ名ヲ爲ニ妙法蓮華、答妙ト者衆生妙ト者故、法ト者即是衆生法ナル故云云、又天台釋云々、衆生法妙云云云

此の答の文は分て二ツ、初の勿論也の三字は惣じて答ふ、二に經云の下は別して一經三師の經釋を引て答ふ、勿論也の三字を講じますれば、問者の申す通り一惑未斷の凡夫の一切衆生は妙法の全躰なることは勿論である、加之依報の松竹梅等の當躰、又は水の流の音風の吹く響き等に至る迄、悉皆妙法蓮華經の全躰である、總じて答へたるのである、是より別釋の一經三師の經釋の文を講義して聴せませす。

○經云、所謂諸法乃至本末究竟等云云、此文、此經文は、連門方便品の權實甚深の境界を明す中の、畧して權實甚深の境界を標したる文を引て、十界の依正の妙法の當躰は皆真如で有ます、此の十法皆真如なれば十如と云のてあります、今宗祖が此の方便品の文を引かせ玉ふ所以は、上の最初の問答の答に、十界の依正は即妙法蓮華の當躰也とある其證據に引きたるのである、經文の所謂諸法と云ふは答の十界の依正のことである、乃至本末究竟等と云ふは答の妙法蓮華の當躰のことであるから引證したるである。

△妙樂大師ノ云々、實相必諸法、諸法必十如、十如必十界、十界必身土云云、此文は金錘論の文である、此文を消釋すれば、實相の妙理には、必ず三千の諸法を具足してある、此諸法には必ず十如が具足してある、此十如には必ず十界が具足してある、此十界には能居の正報の身と所居の依報の土が具足したると釋したるのである、宗祖が此釋を引ききたる所以は、上の答の文の十界の依正の四字の證據に引きたるのである、十界の十界の依正の四字の證據に引きたるのである、土とは必身土と釋す、身とは正報の能居の身である、土とは依報の所居の土である、十界必身土の一句五字が必用の文である、餘の三句は列文なるを以て相從して引き

來たつたるて有ます

△天台ノ云、十如十界三千ノ諸法、今ノ經ノ正体耳云云、此引證の文は、日講の啓蒙に辨明したる通り、大部の中に斯の如き相連の文が見當なければ、大部の文を取意して引きたる者でありませう、今此文を講義しますれば、十如が十界各々に具足してあれば百如となる、又十界各々十界を具足してあれば百界となる、此百界に各々十如を具足してあれば千如となる、此千如が五陰世間にも衆生世間にも國土世間にも具足してあれば三千世間の諸法となる、此諸法が今の妙法蓮華經の正當の法体であると判じたる文也（今の經は二義あり、今昔相傳法華經を今の經と云ふ、又一義には、今天台の經と云ふ、宗の所依の法華經なりと云ふ今の經と云ふ也）此の引證の文は、最初の問答の答の全文の證據に引かれたるのである、如何となれば、十界依正の一句四字の證に、十如十界三千諸法と引き、答の即妙法蓮華之當体也との證に、今ノ經ノ正体耳の一句五字を引きたるのである

△南岳大師ノ云、云何ナラシテ妙法蓮華ヲ答妙ト者衆生妙ナルカ故ト、法者ト、即是レ衆生法ナルカ故ト云云文、此引文

たるてある、と答へたる釋の意味で有ます

△天台釋ノ云、衆生法妙云云文、此の引文は、隨文消釋した斗りては聽講者の衆に少しく難解ませうかと思ひますから、少々辨を費して講義致します、此の文は法華玄義の二卷下にある文で、心佛及衆生の三法を釋しました中の、衆生法妙を釋しました結末の一句の文を引かれたるて有ます、さて衆生法の妙なる事は、經に爲令衆生開示悟入佛之知見と説かれてある、若し九界の衆生に佛の佛知見が具足して無ければ、何を衆生をして佛知見を開示悟入することが出来ませうぞ、九界の衆生に佛界の知見が具足して有ればこそ、經に爲令衆生開示悟入佛之知見と説かれたるてある、學者當知、佛の佛知見は九界の衆生の心内に蘊在し具足しある故に衆生法を妙と云ふと釋する結末の文に、此は是れ今經に明ニ衆生法の妙之文也とある、此の一句の文を引きたるのである、宗祖が此の一句の文を引きたるは、第二の問答に一切衆生も妙法の全体也と可レ云フ歟、答勿論也、其勿論なる證據は、法華玄義

は、南岳の惠思禪師の著述の安樂行義と申す書の文である、此文を消釋しますれば、問て曰く、云何なる法体なる者を説て、其名を妙法蓮華と爲したるのであると尋ね、其答は妙と云ふは、能歎の言と申して、十界の諸法の不可思議なるを歎て妙と名けたるである、法と云ふは所歎の法と申して、十界の衆生は所歎の法である、是れを妙法と名づく、此の妙法は解了し難き者なれば、解了し易き世間の草蓮華に譬へたる者である、是れを蓮華と云ふ、如何となれば九界即佛界と申して、權の九界の因の花に、實の佛界の蓮實を具足し、亦佛界即九界と申して、實の佛界の蓮實に、權の九界の因の花を具足して、九界の當体の外に佛界なく、佛界の當体の外に九界なく、實に言語道斷心行所滅の不可思議の法であることは、譬を取て申さば、世間の蓮華の如く、因の蓮華と同時に果の蓮實を具足し、果の蓮實と同時に因の蓮華を具足してある、是れは凡夫の肉眼を以て見ても能く了解ります、此の難解の妙法を易解の蓮華に譬へて悟らしめて、妙法蓮華と名づけ

の二の卷に衆生法妙と釋したる、此れが其證文である
と引かれたである、此の第二の問答は、別して性徳本有の妙法蓮華の當体を判じたる文であります

問、一切衆生ノ當体即妙法ノ全体ナラズ、地獄乃至九界ノ業因果果皆ナシ、妙法ノ當体ナラ乎 答、法性ノ妙理ニ有ニ染淨ノ二法ニ染法ハ盡成リ迷ト、淨法薰成悟ト、悟ハ即佛界ナリ也、迷ハ即衆生也ナリ、此ノ迷悟ノ二法雖ニ二ナラト、法性眞如ノ一理ナリ也、譬、如下水精ノ玉ノ向ニ日輪ニ取リ火ヲ、向ニ月輪ニ取リ水上、玉ノ体一ナレトモ、隨レ縁ニ其ノ功不同ナリ也、眞如ノ妙理亦復如レ是、雖ニ一妙眞如ノ理ナリト、遇ニ善緣ニ成リ迷ト、遇ニ善緣ニ成リ悟ト、悟ハ即佛性ナリ也、迷ハ即佛性無明ナリ也、譬、如下人夢ニ見ル種々ノ善惡ノ業上、夢覺テ後ニ思ハハ之ヲ、我カ一心ノ所見夢ナリ也、一心ノ法性眞如ノ一理也、夢ノ善惡ノ迷悟無明法性也、如レ是ノ得ハ意者、捨テ惡迷ノ無明ヲ善悟ノ法性ヲ可レ爲レ本ト也、大圓覺修多羅了義經ニ云、一切諸ノ衆生無始幻ノ無明ハ、皆テ從テ諸ノ如來ノ圓覺心ニ建立

云云、天台大師止觀云、無明癡惑本是法性、以之癡迷、故法性變作無明云云、妙樂大師釋云、理性無體、全依無明、無明無體、全依法性云云、無明所斷、迷、法性所證、理也、何云云、體一也、乎云、不審、以之此等、文義不可得、意也、大論九十五、夢、譬、天台一家、玉、譬、誠、面白、思、之、正、無明法性其體一也、云云、證據ハ、法華經云、是法住法位、世間相常住、云云、大論云、明、與無明、無異無別、如是、知、者、是、名、中道云云、但、真如の妙理、有、二、染淨、二法云云、事、證文雖、多、之、華嚴經云、心佛及衆生、是三無差別、一、與、法華經、諸法實相、文、不可、過、也、南岳大師云、心、具、三、足、染淨、二法、而、無、異、相、一、味、平等、云云、又、明鏡、譬、眞實、二、二、也、委、如、大乘止觀、釋、又、能、釋、籤、六、云、三、千、在、理、同、名、無明、三、千、果、成、成、稱、常樂、三、千、無、改、無、明、即、明、三、千、並、常、俱、體、俱、用、文、此、釋、分、明、也、文

た譬如人夢の下より我一心所見夢也と云ふ文まで廿二字は、正しく譬を擧げ、次に一心法性の下の文より十初無明法性也と云ふ文まで十九字は、譬を法に合して判じたる文であります、是より隨文消釋して聽せまます

△問、一切衆生、當體即妙法、全体ナラハ、地獄乃至九界、業因業果、皆是妙法、體ナラハ、乎文、問の文を消釋しますれば、十界の一切衆生が妙法蓮華の全体ならば、地獄界の衆生が上品の五逆十惡罪を犯したる惡業の因に依て地獄界の極苦の業果を受けたる衆生も、乃至其餘の九界の衆生の善惡の業因を造て善惡の業果を受けたる人々が、皆殘らず妙法蓮華の全体でありますやと、問はれたるのである

(27)

△答、法性ノ妙理、有、二、染淨、二法、染法、薰、成、迷、淨法、薰、成、悟、悟、即、佛、界、也、迷、即、衆、生、也、文、此の答の文を消釋しますれば、眞如法性の妙法蓮華の理の中に、九染一淨の二法が具足してあります、依て染法とて見思、塵沙、無明の煩惱の染穢の法が薰陶ば、九界の迷の衆生と成り、淨法とて上求菩提、下化衆生の大

此の本文廿五行十三字は、修德顯現の妙法蓮華の當體を判じたる妙判であります、此の文分て兩段、先は問、次は答、此の答の中に分て兩段、答法性妙理と云ふ文より下、玉ノ譬誠面白、思、之、と云ふまでの十五行二字は、正しく無明と法性と體一なる理由を判じ、二に十、正無明法性と云ふ文より此釋分明也、云云、九行三字の文は、無明法性體一の證據を引て判ず

○初の無明法性體一の理由を判ずる中に、又分て三つ、初め答法性の下二行七字は、法に約して體一の理由を判じ、次に譬如の下、五行、六行五字は譬に約して體一の理由を判じ、三に如是得意の下、十、十八字は取捨して結釋す、又初めの法に約して體一を判ずる文の中に又二つ、初め答法性の下より二法雖二の文に至るの二行は、二而門に約して判じ、次に然法性眞如の一句は、不二門に約して判ず、次に譬に約して判ずる中に又二つ、譬如水精の下より其功不同也と云ふ文まで廿五字は、正しく譬を擧げ、次に眞如妙理の下より迷即無明也と云ふ文まで一行十五字は、譬を以て法に合し、又

慈悲心の淨法が薰陶ば、悟の佛界と成たる者である

△此ノ迷悟ノ二法雖、二ナリ、文、此の一句七字は、承前起後の語と申して、上の迷悟の文を承けて、下の一理の文を引きしたる語であります、上みに申した通り、迷へば九界の衆生と成り、悟れば佛界の人となりて、迷と悟と二法は有ると雖も畢竟はと、云ふ文の意である

△然、法性眞如ノ一理ナリ、也、文、上みに於て辨じた通り、迷悟の二法はあるといへども、然も其迷の九界の衆生も、悟の佛界の人も、法性眞如の一理より生起したる者なれば、迷の九界も眞如、悟の佛界も眞如、十界は唯だ一の眞如であつて、迷悟不二なる者であると判じたる文である

△譬、如、水、精、玉、向、日、輪、取、火、向、月、輪、取、水、玉、鉢、一、隨、緣、其、功、不、同、也、文、此譬の文は、摩訶止觀、六の卷、破法徧の下にあります、今此文を消釋しますれば、迷悟の二法は一の眞如なれども、此眞如が染淨の二法となる理由は、譬へば水精の玉を日天子に

向ければ火が取れる、月天子に向ければ水が取れる、其水精の玉の躰は一つなれども、日の縁と月の縁と、縁が異なれば水精の玉の功用が水火の不同あるが如くなる者也と譬を擧たてある

△真如の妙理亦々復々如し是、雖ニ一妙真如の理、遇ヘハ惡縁ニ成リ迷、遇ヘハ善縁ニ成リ悟、悟、即法性也、迷、即無明也文、此れは合譬の判である、真如の妙理も亦復水精の玉の如き者である、十界の諸法は一妙真如の理なれども、無明の惡縁に遇へば、迷の九界の衆生と成り、明の善縁に遇へば、悟の佛界の人と成り、悟りは即ち法性である、迷は即ち無明であつて、元とは真如の一妙である」と判じたるである

△譬へ如く人夢見ニ種種ノ善惡ノ業ヲ、夢覺之後、思ヘハ之ヲ我、一心ノ所見夢也文、此の譬の文は、龍樹菩薩の大論九十五卷三丁の文である、又宗祖が一の譬を擧げて教示し玉ふには、人が夢に、種々の善き身の上と成りて、娛樂快樂の樂みの業をなし、大福長者の身となりし事を見たり、或は種々の惡き身の上と成りて、飢渴

義致すべし

申歲問答

青村

▼荆妻曰く、今年は申年として可厭年にて候、僕曰く、何てサル事を申サルるにて候や、妻曰く、申とは去に候、去とは縁談に禁物の語なるのみならず、萬事去るとか、大事去とか申して不祥の語に候、どうせ本年は何事につけても縁喜よかるまじくと覺へ候、僕曰く、サル頑固の事は申サルまじく候、惡魔去る苦勞去る、煩惱去る、不祥去ると申せば縁喜よきに候はずや、況や猿の叫聲(ラットドッコイ)物言ふ聲を聞けば、キツキと申し候、キツキとは人語には喜々と翻譯致し候、喜字の重なるは極めて縁起よき事に候はずや、妻曰く、サル説明を承はりては、サル物かと始めて安心致し候、▼姪曰く、叔父さん猿智慧とは如何なる事を申し候にや、僕曰く、よき御尋に候、猿智慧とは淺蕪なる徹底せざる眼の先考の事にて候、何事も師父の命に従

貧窮の苦みの業をなし、勞働下賤の身となりし事を見て、樂みたり苦みたりしたるを、夢が覺めて後に此の事を思へば皆我が一つの心から見たる所の夢でありしなりと判じたるのである

△一心ハ法性真如ノ一理ナリ也、夢ノ善惡ノ迷悟無明法性也文、此の文は合譬の判である、上みの譬の文の我ハ一心ノ所見夢也とある一心の二字を法に合すれば、法性真如の一理に譬へたるのである、人夢見ニ種種善惡ノ業ト云ふ夢の善の業は悟の法性に合し、夢の惡の業は迷の無明に合したる者であると云ふ判なり

△如是ノ得イニ意者、捨テ惡迷ノ無明ヲ、善悟ノ法性ヲ可爲メ本ト也文、此の十八字は、上みに判じたる迷悟の二法を取捨して結びたる判であります、此の文を消釋すれば上に法譬の二法を説て答へたる通りに得意なれば、惡夢の業を見たる迷の無明は死生無常の法なれば捨て取らざる様にして、善夢の業を見たる悟の法性は常樂我淨の安樂の法なれば取て修行の本と爲す可き者である也と、判じたる文である、大圓覺の下は後席に於て講

ひて而して後手を下す沈着ある考慮は正當の智慧にて候、浮薄々々と沈着なき其時限りの考慮は猿の淺智慧にて候、水に浮べる月影を眞の月と思ひ、入りて執らんとして其身水死を遂ぐる如き智慧を猿の淺智慧と申し候、佛教にて申し候へば、本佛釋尊の天月を知らずして彌陀藥師等の水中の影の佛に信念を捧ぐるものはたとひ學士博士と云ふ様な人も皆猿智慧にて候、水中の月は決して執り得らるゝものに無之、強て執らんとすれば足すべりて水中に溺死すべく候、念佛真言等の門徒は徹底成佛は出來申さず候、信仰をすればするほど地獄の水の中に溺死すべく候、おん身は本佛の御子に候、天月を拜む事の果報を得たる身の上に候、されば世間の事にも萬事沈着あるべく候、姪曰く忝なくやんじ候

▼英坊曰く、父さん猿と蟹とはどちらが強いのか、僕曰くどちらが強き候、坊曰く、猿と蟹とはどちらが良子でどちらが馬鹿なのか、僕曰く、ひかし意地惡の蟹あり、此蟹高慢痴戯に猿さんの何もしないのに、自分の

爪にて猿さんの尻尾をつまみて引摺り候、猿さん怒りて兩足で蟹の甲羅を踏み躪り候、それから此蟹の甲羅は扁平たくなり候、蟹は驚愕して此時より眼の玉飛び出て候、此蟹は自分の方から喧嘩を賣りつけて可驚目に逢ひ候ゆへ馬鹿に候、猿さんも小さいものに構ひ候ゆへ良子とは云へず候、むかし猿と蟹とあり、二疋相談してお正月の餅を搗き候、餅出来上りたる頃、猿さん蟹を欺して砂糖を買ひにやり候、其暇に餅を皆々提げて木の枝に登り獨りで食ひ候、蟹さん砂糖を買ふて来て此鉢に驚き、猿さんそんな性悪をせず蟹にも少しおくれと申し候、猿さん嘲笑つて欲しくば此處迄れ出と申し候、蟹は木に登れずくやし泣きに泣き、沸々と口から泡を吹き候、何處のヒヨシカ猿さん餅を取れとし候、周章で、自分も木から落ち候、之を猿も木から落ちると申し候、落ちたとたんに尻餅を踏みつゝ候、之より尻餅を搗くと云ふ事始まり候、尻が痛くて赤い顔を教し候、之より猿の顔は赤くなり候、蟹は此間に餅を引摺りて自分の穴へ搬び候、猿は意地ぎ

だに候、蟹さん謝罪から少しわくと申し候、蟹さん此處迄出てと申し候、猿は鉢が大きくて這入れずと申し候、そんな尻からお這入と申し候、尻から這入り候へば、蟹は爪にて思ひ入れつねり候、それより猿さんの尻赤くなり候、此猿は馬鹿に候、此蟹は良子に候、坊曰くありがたう (おはり)

寄書欄

日憲齋正、養病の効著はれ、元氣回復して近頃轉肉の嘆あり、仍て一文を寄せらる、立論正明にして、宗教の眞價値を説き、警拔なる着想能く時弊を道破す、茲に掲ぐるもの即ち之なり、固を異れて、論議場と仕境に進まじ、讀者請ふ之を諒せよ、(編者 識)

大國民の資格を造れ

清瀬貞雄

一、信仰問題と國家の關係は如何

我邦は既に東洋の君子國を以て居り、文明國を以て任じ、今や亦、新興國の地位に立つて尊敬を受けつゝあ

る名譽の國にあらずや、然り大に然り、然れども宗教信仰の状態に至りては、迷信蠶風未だ猶去らず、太古原始の信仰状態を存じて最底下の信仰部類に彷彿しつゝあるにあらずや。

これを宗教々理に鑑みて其不可なるを論ずるまでもなく、國民の風俗に徴するも、道德の上に試むるも、迷信奇行の興ふる害毒は實に怖るべく惻れむべきものあるを見る。

迷信奇行の昂進し流行し來るや獨り宗教問題に止まらず、實に政治問題に關係すること大なり、國民にして若し生殖器を崇拜するの俗を爲せば如何、彼れを崇拜する心理上の作用は其拜者をして自ら姪心を誘起せしむべく亦淫風を増生せしむべし、加ふるに更に亦、彼れをして懦弱ならしめ、不廉ならしめ、無恥ならしめ、姪俗たらしむ、亦更に更に、破倫の奴となり、人非人となり、煩惱の犬とならしむ、豈唯洪水汎濫の恐るべきのみならずや、豈唯コレラ、ベスト、の比のみにして止まんや、この外猶ほ、動物崇拜の蠻俗なるもの。庶物崇拜の野風なるもの、凡べて謂はれなき迷信奇行なるものは、其國家と其國民との進歩の程度、智識の度合、德行の鹽梅を計り知らるゝ標榜なり、磁針計なり、

晴雨計なり、寒暖計なり、目印しなり、一國の軀面資格に關係し來れるもの斯くの如く夫れ木なり、實にこれ國家の風俗問題なり、教育問題なり、衛生問題なり、政治問題なりと謂ふべし、宗教家が宗教問題として論ずるは素より至當なるのみならず、政治家は政治家として國家の利害に鑑み、學者も教育家も亦、國民教育の利害得喪を慮り、其在朝と在野とに論なく、重大なる論件として提供するに價ひある國家の事實問題たらずんばあらざるなり。

かゝる既行の事實問題を不問に附して、未だ政治問題たらず、教育問題たらずるものは抑も何事ぞ、この罪宗教家に重しとす、然れども政治家の罪、教育家の罪も亦甚輕きを得ず、宗教家は人心を支配す未發に之を防ぐべく純信仰に誘ふべきもの、然れども既に之が形體に發して、國家の軀面に醜を流すに至らば政治家は最早、躊躇なく國政料理の鹽梅として、適當に矯正の法、救済の道を講せざるを得ざるなり、然れども事茲に出でざるものは彼れ等の無識なるに由る乎、冷淡無頓着なるに由る乎、何れに依るにもせよ余れは斯く惟ふ、彼れ等は維新以來の長足の進歩に連れて、各種の經營問題に汲々として日も亦足らず、新事業に營々と

して忙殺せられ、形而上の宗教信仰に關する問題の如きは未だ顧るに遑なかりしに由れるならんと、然れども迷信の内に動きて外に發せば豈唯眼前の小問題にして止まんや、實に社稷の安危に繋れる大なる國家問題ならずんばあらざるなり。

世人は唯洪水汎濫の恐るべきを知れり、傳染流行病の怖るべきを謂へり、而して迷信蠻行の國民を頑にするを、邪にするを、姪にするを、愚にするを知らざるもの如く、洪水よりも流行病よりも猶ほ甚だ恐るべく、忌むべきを知らざるもの如し、彼れ等は知れり、河川の改修、堤防の築造は以て汎濫に備ふることを、彼れ等は知れり、衛生上の奨励、潔清法の施行は以て傳染病に備ふることを、然るに獨り迷信奇行に至りては其汎濫蔓延に委し去りて顧みず、滔々汨々として天下この禍害に罹らざるものなきは當然のことと謂ふべし。

余は國家前途の祝福を念として、茲に茅出度新春を賀すると共に、彼の恐るべく惡むべき迷信蠻行の禍害を變除して、國運の進歩に連れ、民人の自覺して幸にこの禍害を免れんことを祈るものなり。

二、宗教の撰擇

と謂ふなり、雪を白しと見るは常識に於て合理なり、二と二と合すれば四となると信ずるも亦、常識に於て合理なり、合理的の認識、合理的の信仰は恐らく、科學哲學と雖も之を否定する能はざるべし、所以者何、科學哲學と雖も元來これ常識の進みて茲に至り、研積して科學となれり、常識の研究、堂奥して哲學となりしにあればなり、蓋し合理は智目なり、信仰は行足なり、物の辨、黑白の別を知るものは智目ならずや、實を擧げ物を行ふ實踐躬行、これ行足ならずとせんや、智目行足は双輪兩翼の如し、二者其一を欠ぐも正路を行く能はず、智目如何に明なりと雖も行足を無視せば一步も出づる能はず、無用の眼、無能の智にして終らんのみ、行足如何に健全なりと雖も智目を無視せば危險恐らく焉より大なるはなかるべし。

世の信仰界に實驗派と稱するものあり、科學哲學を嫌惡する蛇蝎の如く、學術派と稱するもの亦彼等實驗派を見て、愚蒙なり迷妄なりと嘲笑す、二者共に確に一定利ありて亦確に一失あり、以て未だ其片輪たるを免れ得ず、其信仰の至れるものに及んては彼の「いづれの行もれよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」(觀望の嘆異)の大確立なくんばあらざるなり、去れど

一 合理的の宗教を撰べよ

今人多く宗教を以て迷信物視す、宗教は然かく迷信の結晶躰なる乎、然らず、宗教と迷信とは躰固より同からず、意義亦異れり、見よ、宗教上の迷信は宗教の寄生物なり、寄生物豊宗教の本質なりと謂ふべけんや、然れども茲に憫むべきは世の人、殊更に其寄生物たらんことを好むの風ありて其本躰に歸向するを望まざるの趣あるを奈何せん。

夫れ宗教の本體に似而非なるもの、又寄生して害あるもの、これ則ち寄生物なり、迷信と宗教の正信とは恰も事物の本躰と寄生物との關係の如く至極密接なり、若し信仰にして一步を誤れば直に迷信に陥るものなり。

元來宗教は信仰を以て立脚とするものなり、然り信仰は宗教の立脚なり、信仰は宗教の生命なり、然れども茲に最も注意すべきことは第一吾人が其信仰を捧ぐべき信仰の對象たる本尊は、吾人が信仰を捧ぐべき價值あり道理あるものたらざるべからず、再言せば、吾人の信仰を捧ぐべからざる無道理の對象に向つて信仰を爲すもの之を所謂迷信と謂ふ、吾人の信仰すべき價值あるもの、道理あるものを信仰す之を眞の宗教信仰

もこれは是れ吾人の唯主觀的信仰の一面を專示したるに過ぎず、宗教の本質、信仰の對象則ち本尊其もの、合理なるや、不合理なるやの取調は棚へ上げて只管に捧ぐる信仰なり、再言せば所謂智目を用ひざる行足の一方なり。

勿論、宗教は宗教なり、科學にもあらず亦哲學にもあらず、新古に超越して悠然救世の事業に當るべきもの、彼の學術等の能く破壊し去るものにあらざるなり、然れども記憶せよ、いかに古今を絶する宗教なればとて、又學術に制せられざる宗教なればとて、不合理にても迷信の狂態にても、さては又謂れなき信仰にても、唯信心さえありたれば夫れにて佳しとは謂ひ難なし、若し夫れ之を爾か云ひ能ふものとすれば、宗教の信仰と云ふもの程世に危險にして恐るべきものはあらず、所以者何、吾人の乗托すべき信仰の對象所謂本尊其ものが、合理のものたれば大に幸なりと雖も、若し不幸にしてこれが不合理虚妄のものたれば如何がするや、いかに信仰を主要とすればとて餘りに危險ならずや、吾人は信ず、吾人の信仰は「種々の大難出來すとも智者に我義破られずば用ひじとなり」(圓月抄)とこの智目行足圓滿して欠げざる、合理的信仰の奥底に

安住する教義を撰擇すべきを其主張とせずんばあらざるなり。

二 活動主義の宗教を撰べよ

世に宗教を待つ所以、人に信仰を要する所以は何んぞや、云ふまでもなく宗教其ものは濟世利民を目的とし、主要とするにあればなり、蓋し宗教なるものは社會に活動し、家庭に活動し、個人に活動して以て、個人の修善となり、家庭の圓滿となり、社會の改善とならざるべからず、若し夫れ宗教の其主義にして單に彼の阿練若主義たり、山林主義たり庵主主義たり、厭世主義たり、寂滅主義たり、消極主義なるものを本領なりと云ふものあらば、亦は宗教を誤解したるものなり、其教へ自らの目的と背馳するを知らざるものなり、身、阿練若に入らずんば個人を向上せしめ得ざる乎、人、山林に交はりて家庭の和樂を作り得る乎、世、悉く庵主主義を取りて社會の改善を計り得べき乎、とは世人の夙に問題として研究を怠らざる所ならずや。

憶ひ起す、釋迦人天師、蹶然、伽耶城を去りて仙境に入りなき、去れども彼れは終世、阿練若主義にして終りし乎、彼れは山林主義にして止みたる乎、見よ、彼れは山林より出て、大哉大悟せり、而して亦大に彼れ

は飛躍せり、彼れの化他赴物の大慈悲行は一切の人天をして世尊と呼ばしめたり、人天師と渴仰せしめたりき、彼れの如來事、如來行は濟世利物の外に何にものをも存せざるなり、彼れは世俗の憤闘に超然たり、彼れは世俗の煩悶を解脱せり、彼れは更に還た自行に進んで活動せり、則ち社會に出て、社會を改善せり、家庭の利害和樂を説き示したり、人に向つては人の煩悶愚痴を救ひたりき、是れ明に彼れが人天師としての度生利物の活動に外ならざるなり。

偶世の俗士にして學佛の徒、禪學を志す者あり、彼れ等の多くは山林主義なり庵住主義なり、入道の輩これを高とし、超世の術を得たりとせり、滴水禪師、山林に入れば山林を高として、好んで參禪するもの多く、入道愚庵、京都の近傍に一小地を下して庵住せば俄かに訪客禪學の徒踵を接して門前車馬の響を絶たずと云ふ、庵主よ訪客よ、山林に於て何にものも與へたるか、庵りに於て何にものを受け得たる乎、「見性」か「悟道」か、爾からず既に世に事實となりて顯はれ居るものを見よ、彼れ等俗士の多くは空腹高心の徒となり、高慢頑癡の人間となれり、然らざるものは野狐禪、然らざるものは瓢箪鼈となる、而して彼等は自ら

稱して見性せりと謂ふ、滑稽も茲に至らば却て愛敬あ解りと謂ふべし、世の多くは佛教を目して寂滅教と云ひ、歸ら目主義と解せり、この思想は昔より流布して未だ猶止まざるのみならず、今日猶學佛の徒をして驅りてこの思想の圈内に入らしめつゝあるを見る、この寂滅思想を以て佛教を見、佛教を解釋する程、佛教を誤り佛教を死せしむるものはあらず、獨り門外漢たる彼れ朱子等の寂滅思想(朱子の佛敎觀)を世に磅礴せしめたるのみならず、門内の佛敎諸宗もこの思想を以て正當とし、自ら満足して自ら律するもの多し、佛敎の迷惑蓋し焉れより大なるはなし。

吾人は釋迦世尊の寂滅を唱へ、涅槃を證し玉へるを知る、然れども彼れの寂滅と云ひ、涅槃と云ふもの悉く活動と離れたるものなし、彼れの活動とは化他赴物なり、化他赴物は彼れの本體なり、故に彼れの山林に交りしは世の隱遁主義と同じからず、彼れの仙境に入りしは世の厭世主義とは異なれり、博愛彼れが如く、慈悲彼れが如く、圓滿彼れが如く、勇猛彼れが如く、奮迅彼れが如くにして、以て彼れは志望の多くと理想の生けるが如きものと懐きつゝ、山林仙境に接觸したり

き。

果せる哉、斯くして彼れは山と河と原と里とを問はず、觸向對面悉く彼れの研究場たらざるはなく、彼れが大學校ならざるはなかりき、斯くの如くにして始めて山林も不可なかるべく、阿練若も亦可なるべし。「每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」(法華經)と、これは是れ釋尊が、單寂滅を打破したる、單山林を排斥したる、彼れが破天荒たる無始無終の一大活動を宣言せる慈悲の絶叫なることを知らざるべからず、這中の意義を領得せざれば未だ以て釋迦を評するの資格なしと云ふべし。

吾人は信ず、佛敎の本旨は活動主義なり、具體的改善主義なることを、この所信にして過誤なからしめば、佛敎は決して現實界を無視するものにあらず、否な現實界に活動して現實界を大に濟ふものなり、故に之を放てば社會の改善となり、之を中に置けば家庭の和樂となり、之を巻けば退て個人の安心となる、卷舒大小廣狹の自在は、實に佛敎の教義に於て潤澤せり。

若し夫れ佛敎なるものが寂滅思想に取扱はれ可配せらるれば其働きを滅却せらる實に千古の恨事なり、吾人は深く信ず、宗教の資格に欠くべからざる一要素に數

へ加ふるものは、何にもものなる乎を問はゞ、吾人は躊躇なく活動主義の宗教なりと應へんのみ (次續)

(次續に掲ぐべき廣告)

- 三、道徳的宗教を擧ぐ、
- 四、國家的宗教を擧ぐ(大に議論あり)
- 五、統一主義の宗教を擧ぐ、

顯本宗務廳錄事

告示第拾號

宗内一般

評議員貳名缺補選舉執行ノ處僧都井村恂也(十七票)僧正今成乾隨(十六票)當選承諾ヲ得タリ

明治四十年十二月二十日

顯本法華宗宗務廳

雜報

●宗務廳の開廳式 本宗宗務廳に於ては、例年の通り本月五日開廳式を擧げ、都下本宗各寺院住職參應して年賀式を執行したり

●妙宗誌友新年會 同會は本月八日午後一時より東京芝浦ろせつたホテルに於いて新年大宴會を開き、本誌主任へも案内ありしが生憎繁務の爲め出席し得ざりき當日は定めて盛會なりしならん

●茗谷學園の新年初會 同園に於ける宗義研究會は本月十九日開催の都合にて、本多日生師の講演は引續き本尊論の餘論にて、殊に當日は講演後新年宴會を催はすといふ

●大網通信 千葉縣大網高等小學校にては本月三日同窓會を開き、同町を始め土氣本郷町、山邊、増穂、瑞穂の各村に於ける同校出身者一百餘名會合し、特に招待せる千葉縣中學校教頭金子文學士の「消積兩極の修養」、実倉文學士の「自覺」、千葉縣本宗支學林講師森川寛行師の「佛教一貫の脈路」等、修養上に關する講話ありて頗る有益なる會合なりしといふ

●篤信家杉野伊兵衛氏の葬儀 本宗總本山信徒總代として教學財團評議員として東京正法護持會の主幹として駒込顯本寺の檀頭として護法篤信の聞へ高き、本所

異動報告

功勞ニ依リ特ニ僧階ニ級贈進 中學統 故 吉田完亮 贈大學統 全 全 全 全 人

(右四十年十二月十五日付)

區相生町の杉野伊兵衛氏は、豫て食道癌に罹り静養中の處、本月五日午前一時忽焉遠逝せられぬ、氏はその主家小川家の爲めに畢生の力を盡され、又多年本宗の外護を勵まる、眞に佛教徒たる實を全ふせる當代稀有の護法篤信の士なりき、されば氏の主家は氏の功を多として特に店葬を營み、去る七日は店員一同休業して善提所たる顯本寺に於いてその葬儀を擧げ、特に本多管長親下を招請し、山主山崎大僧正の導師にて莊嚴なる音楽法要を營みぬ、當日は風雨烈しかりしも極めて盛典なりしといふ、氏の如きは實に本宗信徒の模範とこそ謂ふべけれ、嗟惜むべき哉、今管長親下の歎徳文を得たれば、左に掲げて聊か氏の功績を傳へん

歎徳文一章

謹テ勸請シ上ル

本門常住ノ三寶 來臨影壽知見照覽アラセ玉へ 伏シテ惟ミレバ、六道ノ衆生ノ生死輪轉ハ、車ノ庭ニ廻ルガ如ク、鳥ノ林リ移ツルニ似タリ、生レテ生ノ始ヲ知ラズ、死シテ死ノ終ヲ知ラザルコト、盲人ノ前ヲ見ザルガ如ク、凡夫ノ背ヲ知ラザルニ似タリ、本佛釋尊此倒惑ヲ憐ミテ大慈止ムコトナク、三世十方ニ形聲ノ妙化ヲ起シテ、普ク群類ヲ救ヒ玉フコト月ノ闢ヲ除クガ如ク、父母ノ子ヲ愛スルニ過ギタリ衆生若シ發心バ、月ノ清水ニ宿ルガ如ク、聲ノ響ニ應ズルニ似テ、感應忽チ交ハリ利益頓ニ成ズ、只悲ムベキハ、衆生ノ迷執轉々深フシテ淵ノ如ク、邪見

倒惑ノ堅キコト磐石ニ過ギタリ、是レ父子常ニ相逢フテ、而カモ久遠劫來生死輪轉盡キザリシ所以ナルカ 然レバ則チ人生ノ貧富貴賤ノ如キ小階級ヲ超越シテ人生ノ根本ノ意義ヲ考察シ來ル時、眞ノ幸福ト不幸トハ一ニ出離ノ善因緣ヲ得ルト否トニ歸ス、出離ノ善因緣ハ多クシテ廣シト雖トモ、ソノ最勝ニシテ最上ナルモノハ一代聖教ノ中ノ經王タル妙法蓮華經ト六万恒沙ノ上首タル本化菩薩ニ過ギタルハナシ、法華經ニ、此經ハ能ク衆生ノ生死ノ縛ヲ解ク、ト云ヒ善知識ハ大因緣ナリ、ト説キ、法華止觀ニ、或ハ知識ニ隨ヒ或ハ經卷ニ隨フ、ト釋スルモノ是レナリ 茲ニ本日送葬スル所ノ、故杉野伊兵衛氏ハ、幸ニ出離ノ善因緣ヲ得テ、本化ノ再身日蓮上人ヲ人ノ知識トナシ、本門ノ妙法蓮華經ヲ法ノ知識トシテ、本佛釋尊ノ大慈悲ニ乗托シ、以テ信行成就セルモノ、今ヤ生滅有爲ノ人生ヲ去テ、涅槃常樂ノ佛果ヲ獲タランコト、鏡ニ姿ヲ浮ブルガ如ク、掌ニ菴羅果ヲ見ルヨリモ明ナラン、經ニ、是人於佛道決定無有疑、ト説キ、祖判ニ、ヨニノ瀝モシク候へ、今マデ見ツル妄想邪思ハ跡形モナクナリテ、日比賤シト思ヘル我此身ガ、三身即一ノ如來ニテアルベキナリ、ト示シ玉フモノ是レナリ 然レバ則チ氏ノ如キハ、人生ニ於ケル最大ニシテ且ツ眞實ナル幸福ヲ全フシ得タルモノ、所謂正像ノ國

王大臣ニモ越へ、入宗ノ高僧ニモ勝グレタルモノ、今
ヤ大龍天ニ上リテ飛ビ、太子位ニ即イテ立ツガ如ク
尊高巍々自在無礙ナラン

氏ハ嘉永元年二月二日江戸ニ生マル、資性篤實、熱
誠事ニ當リテ勤ゼズ、終始其節ヲ守モル、現主家小
川作藏氏ニ仕フルコト前後實ニ二十有九年、前ノ主
人没後身ヲ以テ業務ヲ整理シ、一意主家ノ爲メニ盡
クス、小川氏ノ繁榮今日ノ如ナルモノ氏ノ力與カリ
テ大ナリ、故ヲ以テ今回氏ノ没スルヤ、主家ヨリ之
ヲ店葬トナシ、一切ノ經費ト其他ヲ辦ジテ以テ氏ノ
功勞ニ酬ヒラル、ト云フ、人情轉々澆漓ノ代ニ斯ノ
事アル、亦當代ノ美談ト謂ツ可シ、又氏ノ業務上ニ
整理ノ能ヲ有セリシコトハ、氏ガ病褥ニ在ル一年二
ヶ月ノ長キニ亘ルモ、業務上何等ノ支障ヲ見ザリシ
ト云フノ一事、以テ之ヲ證スルニ足ラン、又氏病褥
ニ在リテソノ回復ノ望ナキヲ知ルモ神氣悠悠、醫士
ノ言ニ柔順ナルコト赤子ノ母ニ於ケルガ如カリシト
ハ、主任醫士ノ稱歎シテ措カザル所ナリ、復以テ氏
ノ人格ノ高キヲ見ルベク、ソノ病革マルヤ、一點ノ
苦痛ナク、誦經唱題、晏然トシテ逝ク、正シク感應傳
中ノ人ナリ、之ヲ聞クモノ誰カ教慕セザランヤ
氏ハ佛教ヲ信ズルコト極メテ篤ク、我宗總本山全國
信徒總代トシテ、關東四百五十ヶ寺三萬五千ノ檀信
徒ヲ代表シテ多年宗門ニ貢獻シ、又教學財團ヲ設メ
ルヤ、卒先シテ之カ完成ニ盡力シ、現ニ評議員ノ名

譽ヲ擔フテ愈々益々竭ス所アラントセシガ、不幸ニ
シテ俄ニ逝ク、寔ニ惜ミテモ尙ホ惜ムベキナリ、噫
氏行年六十有一

夫レ一タビ去テ萬望ヲ葬ムルモノハ人生ノ死ナリ、
呼ベドモ應ヘズ、叫ベドモ歸ラズ、然レドモ涅槃常
樂ノ信仰ニ生クルモノ、死ハ、萬望中ノ最大最後ノ
希望ヲ成就シテ光明ト法悦トヲ有ス
靈也ハ今ヤ無明深重ノ雲晴レテ靈山ノ空ニ月朗ナカ
ラン、乃至法界周遍利益
于時明治四十有一年一月七日
顯本法華宗管長
總本山妙滿寺現嗣法大僧正日生 稽首々々

●林日法翁の消息 作州津山の日法林菊藏翁は故兒
玉日容上人の教化に浴してより今日に至るまで四十餘
年間一日の如く信仰を相續せられたる熱烈不退の法華
經の行者なり、當年八十歳の新年を迎へて意氣益盛ん
なりと云ふ、近時一書を送りて掲載を求められたれ
ばこゝに録して翁の消息を傳ふることゝなしぬ
老事今茲八十歳の新年を迎へて過去の信仰の經歷を
追懷するに、轉々感慨の禁じ難きものあり書して辱
知の人々に傳へんと思ふ
予は慶應二年夏の頃、事の一念三千の御題目の尊と
きことを感じて信仰を發起せしが、後明治八年故日
容上人に邂逅して正義の信仰を決定し、同九年先き

に延山に登せてありし一子を引き戻して容師の法弟
と爲し存壽と號す、是れ本宗の廣布を念ふ微衷に外
ならず、而るに不幸にして存壽は品性修まらずして
師の勸氣を蒙り、關東に走りて師弟の縁絶ふるに
至る、眞に一代の恨事とす、是より日容上人は岡山
に退隱して顯本法華の法體を擁護せられ、正義の歸
信者日に加はる、予も信者の一人として奉侍怠らず
時に明治十七年なり、爾後信心不退に仕り居りたる
が、容師遷化せられて明治二十四年に日日生等の
諸師東京に顯本法華の正義を擴張せらるゝに會し老
軀を顧みず遙かに東京に走せて高木三三郎氏と俱に
演説の公告を路傍に試みたりき、この空前の淨業に
參與せしは眞に光榮のことなり

存壽は日旂と改稱せしが、明治十九年上總の某寺に
て遷化し、日容上人は明治二十三年一月三十日東京
大學林に於て遷化せらる、岡山津山の信徒悲むこと
嬰兒の母を失へるに過ぎたり、日日生等の諸師の
大化導はこの時に起りて我等嬰兒の岐路に迷ふを導
かれたり、此に於て乎日容上人の化を蒙りて信者
は、男となく女となく勇猛の信心益進み、以て今日
の旺盛を見るに至れり、之を思ふ毎に歡喜の涙禁じ
難し、予は同二十九年當津山弘通所に入りて法務に
奉仕し、無事にこの新年をも迎へ諸方の道友より新
年狀を頂き心の喜び申す計なし
法華正義の信仰は閻浮第一の獲物にして、實に人生

至上の珍寶なり、一たびこの信仰の光に觸れたる人
は、知識何かあらん、財寶何かあらん、人生の生命
永遠の光明は一にこの信仰の力なるを感じて不退精
進の淨信を守らん、されば子孫に傳ふべき唯一の家
實は復實にこの正義の信仰に越へたるはあらじ
又新年には必らず信仰の初日の光明を拜せねばなら
ぬ、單に年の改まれるを祝するのみにては意義除ま
りに淺し、異体同信の行者は身体の健康を報じ合ふ
外に信仰の健全と護法的活動の消息をも併せて傳へ
ねばならぬ
予の念願は
老ひぬれど今や二葉の初發心 折伏弘通未來永遠
道友諸君に健在なれよ
戊申一月 林 菊 藏

●綾部吉田完亮師の訃 第十四教區京都府下綾部町
了圓寺住職吉田完亮師は、舊臘俄然發病し同十二日遂
に遷化せられ、越へて十五日莊嚴なる葬儀を営まれた
り、誠に悼惜の至に堪へず、その詳報は次號に掲ぐべし
●岡山通信 舊臘廿七日岡山の誌友顯月君より左の
通信を寄せらる
△篤信會 丁未の歳最終の演説會を、去る十二月十
八日夜本行寺に開催仕候、年末にも拘らず二百餘名の
聽衆を得て、中々盛會にて御座候、辨士演題は

法華經に現れたる國家觀

我宗の教旨

崇拜心の調整

松崎事成師
原田容廣師
能仁事一師

閉會は十時半頃にて御座候

△祖書講義會 同會は、能仁事一師を講師として、秋季講義會を、去る十二月三日より九日に亘り一週間、本行寺に開講し、四信五品鈔を講義致し候、毎夕會する者八十餘名、熱誠なる講師の講義は、會員をして宗祖上人の末法法華經行者に教示し給へる、切實懇篤なる垂訓に感激せしめ申候、滿講の日、會員一同の所感演説あり、次ぎて幹事須山茂三郎氏の訓辭、講師の答辭あり、終りて萬歳三唱して散會仕候、正法布教の方法、演説、説教等一つとして可ならざるはなきも、分けて本會布教の方法は、最も適切なるものと覺え申候、法雨の餘瀉は廣く他宗の人々をも潤はし申候、詳細は後報仕る可く候

△日蓮研究會 去る二十六日、同會々場に於て、午後六時半より會員の忘年會を催し候、先づ幹事の開會の辭に開らけ、能仁講師の信仰に對する一場の講話あり、次ぎて會員一同の五分間演説ありて、各々胸襟を開きて清談仕候、茶菓の饗應ありて討論會にうつり、甲論乙駁時の移るも知らず午前一時迄討議仕候、先づ論題として「本會々員は他に對して攝受折伏何れをとるや」、「迷信と無信と何れが可なるか」の二問を討議仕候、第一問は、折伏黨勝を占め、第二問は、無信黨

參拜し、爾來益々本宗の隆盛を希ひ、武師と熟議して今般本山講を組立て岩藤安次郎氏を主管者とし、拾名を壹組として數組に分ち、壹組より貳名宛抽籤を以て年々大法會の砌登山して法雨に浴し、且地方教徒の隆盛なる信仰に接し、傍ら旅行見學の人智開發に資する所あらしめんども期し居らる、由、實に宗門の爲め慶賀すべき事なり (十月妹尾久米治郎報)

教學財團公告

●會員並に勸募取扱員諸子へ念告 (品川支所)

一、新舊年末に付定期納金の定めある向は、此際本部へ納金ありたし

一、護持會員以上に授與すべき記章(懷中本尊)の義は目中調製中に付、當分の内はその會員證のみ交付致し、追て記章は出來次第送致すべし

一、申込書の住所を省略し、又は氏名の文字讀み別け難きもの往々有之、帳簿整理その他の上に支障少なからず候故、住所氏名は可成楷書にて明記ありたし

一、申込書の氏名と納金内譯書の氏名と文字異なるものは、總て申込書の文字を掲げて報告す、それが爲め相違と認めらるれば、直に當支所へ通告ありたし

一、申込書の報告を何月分の誌上に必らず掲出するやう御申入の由に對しては、出來得る限りその能に應じ來り候へ共、何分本誌々面の都合又は締切期日も有之、必らず其違ひに致し候れ候故、謹んで此段御了知ありたし

凱歌を擧げ申候、之れを要するに、議論の巧拙は第二として、各自所信を述べて真面目に討議せしこと、各各自の裨益蓋し多大なりしならんと存候、同夜會するもの三十名、萬歳三唱して閉會仕候

●和氣通信 當地本成寺に於ては一月元旦には例年の如く新年式を行ひ、夫より一同山主原田師に隨ひ高等小學校の拜賀式に列席、式辭として郡長の祝辭あり原田師の祝詞演説ありて殊に生徒に對し懇篤なる誨告を與へられ申候、

婦人會は地方の習慣に依り舊曆正月に所謂新年宴會を開催の都合にて目今其餘興準備中に御座候

●備前通信 岡山縣赤磐郡周匝村草生久成寺檀家岩藤茂登遺氏は、本宗の篤信家にして、同寺の世話人として參拾餘年間一日の如く盡し居らる、人なるが、先年武聖麟師赴任せらる、や、師を助けて堂塔を新築し、大に寺門の爲めに盡され、昨年大法會の節武師に隨從して總本山妙滿寺へ參詣し、往復の途次諸處の名刹に

教學財團基金寄附申込表 (第十五回)

(品川支所取扱)

金四百圓	東京府品川町妙蓮寺	檀家	中
金壹百圓	千葉縣市原郡市東村本宮寺住職	西村	會立
金五拾圓	全縣山武郡公平村元福寺住職	齊藤	海叔
金貳百圓	全縣全郡白里村妙滿寺	信徒總代	上代平左衛門
金壹百圓	全縣全郡源村	永福寺檀家	山本熊之助
金壹百圓	全縣長生郡長柄村大正寺信徒	林太喜一郎	
同縣山武郡福岡村寶藏寺檀家(第二回)			
金壹百圓	高橋一郎	金五圓(信徒)	嘉瀬清之助
金五圓	渡邊國三郎	金貳圓五拾錢	高知尾新藏
金貳圓五拾錢	高橋清三郎	金貳圓	高橋彌市
金壹圓	嘉瀬仲次郎	金壹圓	嘉瀬仙太郎
全	嘉瀬徳松	全	高知尾和吉
全	高橋周作	全	小關芳藏
同縣市原郡津村壽福寺檀家			
金貳拾五圓(即納)	高山善内	金貳拾五圓(全)	吉澤莊三郎
全	澤喜三郎		
金拾圓	森庄五郎	金拾圓	吉澤伴治郎
金拾圓(即納)	宮原大三郎	金五圓(全上)	植田辨造
同縣全郡姉崎町妙經寺檀家			國吉市太郎
金拾五圓	三木牧藏	金拾圓	中島勉吉

新年の佳慶芽出度申納候

戊申元旦

本多日生

統一編輯局

恭賀新年

山根顯道
井村恂也
鈴木乾學
今成曄
笹川眞隨
梶木日應

顯本法華宗務廳

賀正

山根顯道
野口義禪
鈴木口義
藤崎通學
梶木日種

顯本法華宗評議員

謹賀新年

中田日隨
今成乾
山岡會俊
井村恂也
竹內無着

恭賀新年

明治四十一年一月一日

總本山妙滿寺

野口義禪
銀井乾升
鈴木孝碩
川崎英照
森義觀

恭賀新年 教學財團

京都本部
品川支所
姫路支所

賀正 僧俗同信會

顯本法華宗大學林

謹賀新年

小林日虔
秋名日日
山名木信

千葉縣支學林

謹賀新年

錦織日航
萩原啓門
齊藤海
木村乾
森川寬行
坂本日日

賀正 東京實業

恭賀新年

在大坂 鼓城 松尾忍水

小林樟雄主幹 鼓城松尾忍水主筆

大阪報知新聞 (日刊) 地方は郵送料共 一ヶ月金二十三錢(前金)

發行所 大阪東區 大阪報知新聞社

謹賀新年

窪純榮
森田純
成島泰行

字都宮市法華寺住職

謹賀新年

北澤久太郎
勉強印刷業

基礎金領收報告

東京市本所區向島中之郷町

廣崎金十郎殿

一金壹圓也 右本團基礎金中へ寄贈相成正に領收候也

明治四十一年一月 統 一 團

當寺住職 吉田完亮 (本光院日稱) 儀本月

十二日急病ニテ遷化仕り候間 此段辱知諸師へ謹告仕り候也

丹波綾部

明治四十年十二月 了圓寺

統一

第百五十六號

要品値上ゲ廣告

顯本法華宗要品 附回向文

紙價印刷費製本料共騰貴に付無止左の通り値上仕候

- 一 上製分壹部に付貳拾貳錢
 - 一 並製分壹部に付金拾四錢の割(郵稅當方持)
- 五拾部以上は多少の割引可仕候

淺草新谷町十四 慶印寺